The Japanese Association of Rehabilitation Medicine

I-E-2 リウマチ患者のADL，QOLの検討

横浜市大 安藤 徳彦
弘前大 福田 道隆
福岡大 岩崎 敬雄
東北大 今田 元
神奈川リハ病院 伊藤 良介

リウマチ患者のQOL向上の手掛かりを得る目的で共同演者の医療機関外来を受診した在宅患者を対象に個人情報，福祉サービス利用，ADL，社会的活動性，主観的QOL，疼痛を調査した．検討対象は男10名・女60名，平均年齢58.1歳，単身6名・二人27名・三人以上37名，介護者不必要36名・配偶者19名・他15名だった．更衣動作以外のADLは大多数が自立していたが制約なしは1/3だった．家事は半数が実行しており，社会的活動に外出参加者は半数以下だった．福祉利用者は少数だった．主観的QOLは肯定的回答と中間とが多数を占めて相半ばした．項目間の関連性をχ^2検定と数量化2類を用いて検討した結果，移動動作と排泄動作は，福祉利用の一部および社会的活動性との関連を認めたが，主観的QOLとの関連は認めなかった．社会的活動性は主観的QOLの一部と関連を認めた．数量化理論第2類で検討した結果，社会的活動性はADLと高い関連性を，主観的QOLとも関連性を認めた．以上の結果からADLを十分に改善することで社会的活動性を向上させ，主観的QOLの一部を間接的に向上させる可能性を述べた．

I-E-3 施設入所の慢性関節リウマチ患者における現状調査

岡山県立大短大部 太田 裕介
岡山大整形外科
井上 一・原田 良昭・土井 武
松尾 真嗣

【目的】 施設入所者の中で慢性関節リウマチ（RA）に罹患している者の現状調査を行った．

【対象と方法】 岡山県内の特別養護老人施設（特養）77施設に対するアンケートを行った．調査項目は，RA患者の入所者数，および各々の患者の年齢，性別，罹病期間，移動度（藤林ら），厚生省特定疾患神経・筋疾患リハビリテーション調査研究班ADL分科会によるADL評価表試案（96点満点，4段階）である．

【結果】 郵送した特養の77施設中41施設（53%）より回答があり，全入所者（平均68.2名）中，RA患者数は平均2.0名（0〜19名）合計84名で，全入所者の3.0%であった．調査できた80名（男9名，女71名）は平均年齢79.3歳（61〜96歳），平均罹病期間21.9年（6〜77年）で，移動度は，「歩行不能で実用性のある車椅子動作」のClass 4 b以下が61名と大多数であった．ADL評価表の合計は平均28.6点（0〜96点）で，「正常」「自立」の合計は，「言葉が話せる」，「箸などでの食事」，「グラスの水を飲む」，「ベッド上起居動作の「坐位保持」，「寝返る」，「仰臥位から長坐位」で30名以上を占め，障害されにくい項目と思われた．また「全介助」は膝屈曲位で下肢に荷重する「階段昇降」，「敷居をまたぐ」，「床からの起立」，上肢の良好な可動域や筋力が要求される「背中を洗う」，「ベルトを締める」，「大瓶のネジ蓋開閉」で70%以上を占め，障害されやすい項目と思われた．

I-E-4 慢性関節リウマチ患者の日常生活動作と骨塩量との関係

長崎大附属病院理学療法部
松本 智子・横尾佳奈子
同 整形外科 進藤 裕幸

慢性関節リウマチ（RA）患者の日常生活動作（ADL）と骨塩量との関係を知る目的に以下の研究を行った．

【方法】 アメリカリウマチ学会の診断基準を満たすRA患者41人（21〜76歳，平均年齢55歳，女性37人，男性4人）を対象とした．骨密度は同一患者において，第2〜4腰椎前後像，橈骨遠位1/3および超遠位部をDXA法（LUNAR社製）で，そして踵骨部を超音波法（LUNAR社製）とDXA法（京都第一科学）で測定し，性年齢で補正したZ値を求めた．機能障害の程度は厚生省神経・筋リハビリテーション調査研究班のADL評価法を用いて，上肢機能は食事，更衣，整容，入浴動作を，下肢機能は起居動作と移動作の点数を合計し，骨塩量との相関関係を調べた．

【結果】 骨塩量のz値の平均は全例正常より低値

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Rehabilitation Medicine

を示していたが，測定部位により異なり，腰椎の骨量の減少は踵骨や橈骨に比べると軽度であった．機能障害の程度と各部位の骨密度との関係を調べると，腰椎ではADLとの相関関係はみられなかったが，橈骨，踵骨の骨塩量はそれぞれ上肢，下肢機能と相関関係を示した．

以上の結果は，RA患者において，ADL機能の維持は骨粗鬆症の進行を防ぐためにも重要であることを示唆するものである．

I-E-5 RAの活動性と骨代謝マーカーの検討

関西医大附属洛西ニュータウン病院整形外科
亀山　修・中東　康純・上島　大輔
辻　秀記

【目的】 近年骨吸収マーカーの一つとして尿中ピリジノリン（Pyr），デオキシピリジノリン（Dpyr）の測定が注目され，各種疾患における有用性が報告されている．我々は慢性関節リウマチ（RA）患者の尿中Pyr，Dpyr値および骨塩量を測定し，その臨床的有用性を検討した．

【方法】 対象はRA患者のうち長期ステロイド投与例は除外した，Class IおよびIIの閉経期後の女性35名（平均年齢58.7±9.4歳）である．また同年齢の女性43名をコントロール群とした．正午前後に採尿し，尿中PyrおよびDpyr値を高速液体クロマトグラフィーを用いて測定し，同時に血清中BGP（osteocalcin），尿中のHydroxyprolineおよびCreatinineを測定しHP/Crを算出した．骨密度（BMD）測定にはNorland･Stratec社製pDEXAを用い，橈骨の遠位1/3部で測定した．またRAの活動性の指標としてRF，CRP，ESRおよびLansbury関節指数を測定した．

【結果および考察】 RA患者の尿中PyrおよびDpyr値は51.5±34.6 mMol/mCre，6.9±3.5 mMol/mCreで，コントロール群の31.9±16.8 mMol/mCre，5.1±2.8 mMol/mCreより有意に高値を示した．また骨密度はRA群ではコントロール群に比べて有意に低く，BMDは罹病期間が長くなるほど低下し両者間には負の相関が見られた．またPyr，DpyrはESRおよびCRPが高いほど高値を示し，ESRと両者間には正の相関が見られた．また関節点数とも同様相関が見られた．以上のことよりPyr，DpyrはRAにおける骨破壊の評価への有用性が示唆された．

第1日　E会場
リウマチ2

座長　三　友　紀　男（I-E-6～9）

I-E-6 慢性関節リウマチに対する外科的治療とQOL

福井医大整形外科
大森　弘則・井村　慎一・川原　英夫
馬場　久敏

【目的】 RA患者のQOLをいかに改善するかは非常に難しい問題である．そこで，RA患者に対する外科的治療がQOLの改善にどの程度寄与しているのか，またRAのQOLにはどのような因子が重要であり，また患者はどのような点について改善を希望しているのかについて調査を行った．

【方法】 RA患者116例（少関節型52例，多関節型37例，ムチランス型27例）に対し，AIMS 2によるQOL評価を行った．まず，手術がQOLに及ぼす影響を，病型・活動性（LI：Lansbury指数）別に分析し，次いでQOL評価がRAの罹病期間やstage，class等のどの因子と相関があるのかについて多変量解析を行った．さらに患者が望む改善希望項目についても検討した．

【結果】 手術によるQOLの改善度は，少関節型や多関節型のLI低値群では良好であったが，多関節型のLI高値群やムチランス型では改善傾向があまり認められなかった．またQOLの評価には，上肢，下肢機能項目が最も相関し，ADLの程度に強く影響していた．改善を望む項目においては，少関節型のLI低値群では手指機能や疼痛を，病型や活動性が進むにつ

NII-Electronic Library Service